

# 居酒屋 ほっこり

秋川滝美 Takimi Akikawa

10

# 目次

我が家のすき焼き ..... 311

たこ焼きパーティー ..... 241

休業のご挨拶 ..... 153

黄ばんだ凶面 ..... 81

自分たちの城 ..... 5

自分たちの城

湯豆腐

鶏腿肉と大根の煮物

暮れも近づいた十二月第一日曜日の朝、東京下町しとまちにある『山敷薬局』やましきやの店内では、店主シンゾウを含めた近隣住民たちが難しい顔を突き合わせていた。事の発端は、定例となつてある町内会の公園掃除で、馨かおるがシンゾウに相談を持ちかけたことだ。

ちなみに、馨は『山敷薬局』と同じ商店街にある居酒屋『ぼつたくり』の店主美音みねの妹である。

美音が恋人の要かなめからプロポーズされ、すつたもんだの末に結婚を決めたのは十月末のことだった。それから一ヶ月以上が過ぎたというのに、未だに姉からその後についての話が一切出てこない。普通なら、喜び勇んで結婚式の準備にとりか

かるだろうし、要が忙しくて相談する暇がないにしても、衣装をどうしようとか、誰を呼ぼうとかの話が姉の口から漏れてきててもよさそうなものだ。特に衣装については、デートの際のコーディネイトまで馨に頼り切りの美音が、何のアドバイスも求めてこないなんてあり得ない。

とはいえるとしても、自分が口を出すことではないということぐらいわかっていた。だからこそ、これまで姉の様子をじりじりしながら見守っていたのだ。ところが、一ヶ月以上経つてもまったく進展が見られない。

もしかしたら姉は結婚式 자체を考えていないのでないか、と不安になつた馨は、『ぼつたくり』の常連たちに相談してみることにした。

タイミングを計るのは難しかつたが、幸い思い立つてすぐの日曜日が町内の公園掃除にあたつていた。公園掃除は美音と交代で出席していて、今週は馨の当番になる。当然姉はその場にいないから、相談をするにはうつつけなのだ。掃除がある日、シンゾウはいつも早めに公園に来る。そのことを知つていた馨は、自分も一番で公園に駆けつけ、現状報告を兼ねた相談をしてみた。話を聞い

たシンゾウは、続いてやつてきたマサとウメに声をかけ、掃除が終わつたあと『山敷薬局』で対策を練ることになつたのである。

お疲れさん、まあ茶でも……と、三人に店内の冷蔵庫にあつたペットボトルのお茶をすすめたあと、シンゾウは早速本題を持ち出した。

「美音坊<sup>ぱう</sup>の結婚式のことだが……」

「何事かと思つたら、その話かい。シンさんの口から出たつてことは、いよいよ段取りが決まつて、町内でどうやつて祝うかつて話だな?」

すっかり勘違ひしたマサが、嬉しそうに言う。ウメはウメで、生きてるうちに美音坊の花嫁姿が拝めるなんて、となにやら感慨深げにしている。シンゾウは慌てて、馨に今日集まつた趣旨を説明するよう促した。

「……というわけで、ちつとも進んでないの。さすがに、ちょっとまずいんじやないかと思うのよね……」

「美音坊は仕事はテキパキするけど、自分のことになつたらものすごくのんびり

屋だからねえ」

そこでウメは、壁に掛かっていたカレンダーを見てため息をつく。

「もうすぐ年が変わつちまう。いくらなんでも、ちょっとは考えないと……」

ところがマサは、至つて気楽な発言をする。

「でもよお……今時はジミ婚つてやつが流行らしいし、肉屋の息子も披露宴はしなかつただろ? 美音坊も同じように考へてるのかもしれないぜ」

「いや、マサさん、それはちよつとまずいよ。お姉ちゃんはそれでよくても、相手は要さんだよ?」

「馨ちゃんの言うとおりだね。肉屋ならヨシノリさんがユキちゃん夫婦を引き連れて町内<sup>あんぎや</sup>行脚<sup>さしま</sup>で済むだろけど、佐島建設の息子じやそうはいかない」

「とはいっても、美音坊のことだから『結婚式なんてお金がかかるし……』とか

なんとか言いかねねえぞ」

結婚式は女の夢なんて考え方から、一番遠いのが美音坊だ、とマサは断言した。誰もがそれに頷いたあと、ウメがしみじみ言う。

「なんだらうねえ、あの締まり屋ぶりは。あんな上物じょうものを捕まえたんだから、ぱーつと派手にやればいいものを……」

「ウメ婆ばあ、あんたは『捕まえた』って言うけど、俺にはどっちかっていうと逆に見えるよ」

そう言いながら、シンゾウはこれまでのふたりの経緯を思い返してみた。  
シンゾウから見ると、要は、自分からは何ひとつ仕掛けていないように見えて、その実、全部計算の上じょうだつたようにしか思えない。

公園に捨てられていた子猫の処遇に始まり、一緒に電器屋に行つたこと、その帰りに自分の家に連れていくつて母親に会わせたこと、店が休みの日ではなくわざわざ閉店後という遅い時間にバーに連れ出したことなどは馨から聞かされた。その結果、頭に浮かんだのは『深謀遠慮しんぼうえんりょ』という文字だった。

もちろん、それらがすべて要の計算に基づくものであつたとしても、美音の反応がことごとく予想外で、さらに彼の母親の介入もあった結果、早いんだか遅いんだかという展開になつたことは確かである。

とはいゝ、シンゾウの目には、要と美音が思い合つてゐることは明白だつたし、いつかは夫婦になると思つてゐた。だからこそ、プロポーズをやり直したあとは、すぐさま結婚式や新居について検討し始めるだろうと考えていたのだ。たとえ美音が二の足を踏んでも、要が怒濤どとうのごとく、結婚に向けて突き進むに違ひない

と……

それなのに、今もつて何ひとつ進まず、話題にすら上つてこない。最早、美音を捕まえることに全力を使い切り、結婚式のことまで考える気力が残つていないので？ と心配になるほどだつた。

「ま、俺が見たとこ、美音坊は何にも考え方やいなかつた。こと色恋沙汰に閑じて、あの子に手練手管を期待するのは無理つてもんだ。そこは芸者で鳴らしたウメ婆とは同列に語れねえ。仕掛けたのはタクのと一ちゃんのほうだね。どつちにしても、美音坊は美音坊で考えがあるのでかもしけねえ」

シンゾウの意見に、マサはマサで頷く。

しひねえ。それを美音坊が……」

「きっと店のこととか、あたしのこととか、あれだとか、これだとか、散々理屈をこねくり回して待たせてるんだ……あーもう、面倒くさい！」

さつさとお嫁に行つちやえ！ と馨はやけくそのように叫ぶ。ウメは、そんな

馨にくすりと笑いながら言う。

「それはそれで寂しいくせに。とはいえ、もしされが本当だとしても、長すぎた春つて言葉もあるし、待たせすぎはやっぱりよくないと思うねえ……」

ウメは、あの男、随分猫を被つてるけど、本当はとんでもなくやんちゃなんじやないかい？ 大丈夫なのかい、美音坊は？ なんて心配まで始めてしまう。

ところが馨は、心配そうにするウメに笑いながら答えた。

「平気だよ。猫を被つてるのはお姉ちゃんも同じだもん。猫かぶり同士でうまくやつてくんじやない？ お互いに被つてる猫の種類までちゃんとわかつてるよ、あのふたりは」

「おやそろか。そりやけつこうなこつた。猫かぶりふたりにタクが入つて新居

は猫だらけだね、騒がしいことだ」

「あーそう、その新居が問題なんだ」

そこで、シンゾウが、馨の顔をちらりと見た。

「プライバシーの侵害つて騒がれそしだが、ちよいと言わせてもらうよ？」

「いや、それ、あまりにも今さらだし」

この町内会、特に『ぼつたくり』の常連たちは丸ごとひとつの家族のようなのだ。しかも今は、相談を持ちかけたのは自分のほうなのだから、という馨の言葉に頷き、シンゾウは口を開いた。

「あのふたり、そもそもどこに住む気でいるんだ？ どうせタクのと一ちゃんのことだから、どこかにでかい家があるんだろう？」

「そうみたい。お母さんが住んでる家もあるし、学生時代に使つてたマンションもあるんだつて。たぶん、そのマンションでもふたりで住むには十分なんじやないかなあ……」

たくり』に訪れたときに出てきた話から、馨は間取りや広さを推測し、新居に相応しいかどうかを考えたそうだ。

なんとも姉思いの妹ではあるが、そこまでしなければならないほど美音がのんびりしているということなのかもしれない。

いずれにしても新居の候補地は現時点ではたつあり、いずれもこの町ではない。その事実に、一同が軽くため息をついた。

「どっちを選ぶにしても、この町を出てくつてことか……」

『寂しい』という言葉を口にしたかったんだろうに、マサはあえてそれをしない。

美音の結婚に水を差してはならないという気持ちが、彼の表情に溢れていた。シンゾウも同じ気持ちだし、おそらくウメも共感しているだろう。

ところが馨は、そんな三人に小首を傾げつつも再び口を開いた。

「いきなりお姑さんと同居っていうのはバスしたいだろうし、やっぱりマンションのほうがいいんじゃないかと思うんだよね。で、お姉ちゃんにもそう言つたんだけど、なんだか煮え切らないのよ」

「などうと?..」

「マンションからここまでけつこう時間がかかるみたいで、通つてくることを考えると決めきれないみたい」

「だろうねえ……。美音坊は、先代の墓をどうするつて話になつたときも、ずっとこの町で『ぼつたくり』を守つていくつて言つてた。あたしらが慌てて、先のことはわからないんだからつて止めたぐらいだ。結婚も、この町を出ることも、考えたこともなかつただろうさ」

シンゾウも、美音に店を閉めるという考えが微塵みじんもないことはありがたいと思う。けれど、それが本当に美音のためになるのかというとかなり疑問だ。かといつて、本人の気持ちを無視して町の外に追いやることなどできるわけがなかつた。『美音坊は、なんとかこの町に住めないかつて考えてくれてるんだろうけど、やっぱりそれは無理な相談だよ』

いくら考えても打開策は浮かばない。それで美音は、結婚の話自体を進められずにいるのではないか、というのがウメの推測だった。

「とにかくこの町を出たくない、か……」

「美音坊の気持ちは嬉しいけどねえ……」

そんな言葉を交わすマサとウメの顔には、喜びと困惑が入りまじっている。

『ぼつたくり』を続ける限り、美音は毎日ここに通つてくる。それがわかっていても、美音がこの町の住民でなくなるのは寂しい。それが町内会メンバーとしての正直な気持ちだろう。

このまま困った顔を突き合わせていても仕方がない。ということで、シンゾウはとりあえずもうひとりの当事者について訊いてみることにした。

「ところで、それについてタクのとーちゃんはなんて言つてるんだ? まさか意見が割れて大喧嘩、なんてことになつてねえだろうな?」

周囲がやきもきしまくる中、ようやくまとまつたふたりが、家の問題で喧嘩別れなんてことになつたら、目も当てられない。シンゾウは、それぐらいなら、この町のことなんざ諦めろ、とどやしつけてでも要のもとに送り込みたい気分だった。

ところが馨は、その心配はない、と笑顔で答えた。

「要さんは大丈夫。ちゃんと確かめたし」

いつまでも煮え切らない姉にしびれを切らし、馨はこつそり要に確認してみたらしい。要もSNS内の『ぼつたくりネット』のメンバーだったから、連絡は取りやすかつたという。

住居問題で美音が悩んでいるらしいと知らされた要は、あつさり答えたそうだ。『要さんも、お姉ちゃんはこの町に住んだほうがいいって考えてくれてた。それどころか、前からお姉ちゃんにはそう言つてくれたみたい。で、あたしは意気揚々とお姉ちゃんのところに行つたわけ。なんにも問題はないじゃない、この町に住みなよ、つて。そしたら……』

今の家でもいい、近所に新しい住まいを探してもいい、とにかくこの町に住もう、と要は言つてくれた。それならその言葉に甘えればいいではないか、と馨は美音に言つたそうだ。

を聞いて嬉しそうにしていた。けれど、これなら大丈夫、と馨が安心しかけた矢先、美音はやつぱり眉根を寄せたという。

「すごくありがたいけど、要さんに申し訳なさすぎる。なにより住むところがない。あんたを追い出すわけにはいかないし、一緒に住むのは要さんにもあんたにも悪すぎる、とかなんとか、うだうだうだうだうだうだ……」

「うだ」を山ほど連ねたあと、馨は大声で「めんどくさい！」と叫んだ。

「もうね、公園にテントでも張って住め！」とか言いたくなつちやつたよ」

「いや、馨ちゃん、いくらなんでもそれは……」

ウメは呆れた顔になり、マサは「そちらの植え込み、ちょっと刈り込んで場所を作つてくるか？」なんて冗談を言う。マサは植木職人だからそれぐらい朝飯前だろうが、明らかに法に触れるし、美音たちにしても新婚生活がテントから始まるなんてまっぴらだろう。

「テントは勘弁してやつてくれよ。だが、実際問題、住むところがないってのは本当だよな」

そう言うと、シンゾウは半分だけ開けられたシャッターから外を窺うようにした。

ここは商店街だから、住民の大半は店の二階に居を構えている。賃貸物件といえば、『ぼつたくり』の裏にあるアパートぐらいのものだ。だが、そのアパートも現在満室だし、この先住民が入れ替わるかどうかはわからない。新しいマンションが建つ予定もない。空き地がないのだから当然である。

「住みたくても住めない。諦めるしかないのかねえ……。あ、うちは部屋が余つてるし、何なら……」

「なんで新婚早々ウメ婆と一緒に住まなきやなんねえんだよ。おかしすぎるだろう！」

即座にマサに突っ込まれ、ウメはすんなり頷いた。

「だよねえ。夫婦水入らずならまだしも、赤の他人と同居したって聞いたら、さすがに要さんのお母さんが黙つちゃいないだろうね」

「あーそれぞれ、それもお姉ちゃんの『うだうだ』のうちのひとつなんだ」

そこで馨が持ち出したのは、要の母である八重の話だった。

「お姉ちゃんは、八重さんがひとりになつちゃうのが心配なんだって」  
要はもともと同じ佐島家の敷地内に建つてゐる二軒のうちの一軒に暮らしてい  
た。片方には祖父母、もう片方には母と兄、そして要が住んでいたのだが、大學  
進学を機に要はマンションでひとり暮らしを始めたという。

しばらくその状態が続いたのち、要の大学院卒業と前後して兄が結婚、母親は  
新婚夫婦に家を譲つて外に出た。夫はとつくに亡くなつていたし、新婚夫婦と住  
むよりは、小さな家にひとり暮らしのほうが気楽だと考えたらしい。それを聞い  
た要は、八重がひとりになるのが心配で、母の新居に移つた。当初八重は、せつ  
かくひとりになれたのに、なんて言つたそつだが、先般のように体調を崩すこと  
もあり、要がいてくれたのはやはりありがたかったようだ。

要が結婚してこの町に住むとなると、八重はひとりになつてしまふ。美音はそ  
れを心配しているのだろう。

「要さんが八重さんをひとりにさせたくないのはわかつてゐるし、お姉ちゃんだつ

て、お姉さんなんてどうでもいいなんて人じやない。かといつて、八重さんに  
までここに住んでくれなんて言えつこないし」

かくして話はちつとも進まず、年の瀬は目の前、というのが今の状況なのだ、  
と馨は嘆いた。

「お姉ちゃん、昨日も『このままじゃ駄目かなあ……』つて呟いてた」

『このまま』ということは、結婚もせず、一緒に住まず、ただ閉店時間間近の  
『ぼつたくり』に要が通つてくるだけの状態のことか、と馨は頭を抱えてしまつ  
たそうだ。

休日に一緒に出かけることがないとは言わないが、要は忙しいし、美音は連休  
なんて年に一、二度しか取れない客商売である。旅行はおろか、外で会うことす  
ら難しい現状で、さすがにそれは……とシンゾウも呆れてしまった。

「いくらなんでも、タクのとーちゃんが気の毒すぎる」  
「だよな。ただでさえ、あつちはじりじりしてゐるはずだぜ。いつまで待たすん  
だ！」つて。その挙げ句、もういいや、とかなつたらどうするんだ！」

シンゾウの言葉であらぬ心配を始めたマサに対し、ウメは冷静だった。

「そんな心配はいらないよ。あの『天然』の美音坊相手にめげずに頑張つてきた男だ。今更、逃げ出したりしないさ」

「あたしもそう思う。もう待てないってなつたら全部自分で段取りつけて、さあ行くぞ、つてお姉ちゃんをかっ攫つていきそう」

その場にいた四人が四人ともその様子を頭に描いた。

いざとなつたら要は、被つていた猫をかなぐり捨てて、家から式から全部手配して、あれよあれよという間に美音を自分の家族にしてしまいそうだ。

「要さんは、やんちゃだけど辛抱強い。いざとなつたら行動力もある。だから、上物じょうものだって言うんだよ。ただまあ、できれば『合意の上』じょうじであつてほしいけどね」「合意つたつてなあ……美音坊はあれでかなり頑固だし……。それに、馨ちゃんのこともある」

そこでシンゾウはいったん言葉を切り、馨を見た。

美音の結婚は、馨の生活にも大きな影響を与える。そのあたりをどう考えてい

るのか、一度確認しておきたいが、今、訊ねて大丈夫だろか……

そんなシンゾウの眼差しに、馨はやるせなさそうな目になつて言つた。

「やっぱりお姉ちゃん、あたしのことも気にしてるんだよね……？」

「まず、間違いねえな。それで、馨ちゃんは、もしもあのふたりが一緒になつたらどうするつもりだい？」

「要さんのおつかさんの心配しててる場合じゃねえな」

馨だってひとりぼっちだとマサは心配する。もちろんシンゾウも、おそらくウメも同じだろう。

両親が亡くなつたあと、馨はひとつて美音は姉であると同時に、父であり母でもあつた。

その美音が結婚したあと、馨はひとりで大丈夫なのかと……

マサはいとも簡単に言う。

「一緒に住んじまえよ。そしたら美音坊の心配も……」

「マサさん、あたし、ラブラブ全開に違ひないふたりと一緒に住む根性なんてな

いよ」

「そうか、そうだよなあ……」

当然予想内の答えだと領いたものの、シンゾウの心配はさらに募る。

「美音坊、もしかしたら馨ちやんが家を出るまで、結婚しないつもりじゃねえだらうな？」

「前はそんなことも言つてた。あんたをお嫁に出すまでは、気が気じやないから結婚なんてできないって……」

姉妹の間でその話が出たのは、馨が哲と付き合い始めたばかりのころのことだつた。

それまでも彼氏は絶えずいたものの、年齢からして結婚を考えるような関係ではなかつた。だが、哲の場合は、馨自身がいつかは……と不確かながらも未来図を描いていた。だからこそ、自分より五歳も年上の姉の将来が気になつて、結婚について訊ねてみた。<sup>（ナシ）</sup>その結果、返ってきたのは『あんたをお嫁に出すまでは』という言葉だつたのだ。

「家のこと、八重さんのこと、あたしのこと……。これじゃあ、お姉ちゃん、いつになつたら結婚できるのやら……」

「こりや、美音坊の結婚話をせつつくより、『もうちょっと待つて』の兄さん——哲くんつていつたかね、あの子を連れてきて説教するほうが早いような気がする」  
ウメにそんなことを言われて、馨は大慌てで手を左右に振つた。

「やめて！ そんなことされたらあたし、困っちゃう！」

「冗談だよ。あの兄さんの年じやあ、まだ踏ん切りつかないだろうよ。余計な」として話が壊れたら、それこそ美音坊が嫁に行けなくなる

「あ、ウメさんひどい。あたしの結婚は、お姉ちゃんのためだけなの？」  
「そんなわけないだろ。美音坊も馨ちやんも大事なうちの娘たちだからね。ちゃんと幸せになつてほしいって思つてるよ」

「そうそう。うちの町内会が先代から預かつた大事な娘たち。だからこそ、ここのいらの住民は躍起になるつてわけだ」

ウメやマサはときどき冗談の真ん中にそんな台詞<sup>セリフ</sup>を紛れ込ませる。それはきっと

と、思いやりの気持ちを真っ直ぐに伝えるのが照れくさいからに違いない。

ふたりの思いやりに触れ、ちょっと泣きそうになつてしまつた馨を見ながら、シンゾウはしみじみ思う。

この町内の皆は、結局こんな連中ばかりなのだ。厳しくて口やかましいところもあるけれど、心の底はとても優しくて、いつだつて誰かのことを心配している。だからこそ、美音もここを離れたくないと思うのだろう。馨も同じだ。姉を送り出すためには、自立する必要があると薄々わかついても、この町を出ることが心細くてならないに違いない。

「本当はわかつてるんだ。あたしがどこかにアパートでも借りれば、お姉ちゃんたちはあの家に住める。でも……あたしは結婚したらきっとこの町にはいられない。だからよけいに、それまではなんとかつて思つちやう。我が儘だよね……」「あたしは我が儘だとは思わないよ。なにより、そんなことしたつて美音坊は喜ばない。馨ちゃんをひとりにするだけでも嫌だろうに、その上、この町からも遠ざけるなんてこと、するわけがない」

怒つたような口調に、ウメの苛立ちが感じられた。そこには、助けてやりたいのに何もできないもどかしさが込められていた。

「美音坊たちと一緒に住むわけにはいかない。結婚にもちよいと早い。なにより、借りようにも物件がねえ……ほんと、困ったもんだな」

マサが途方に暮れたように言つた。

「要さんね、お姉ちゃんに言つたんだって。『君がいる場所が俺の家。それがどこにあっても関係ない』って……」

そこでマサはヒューッと短く口笛のような息を吐き、ウメは両手を叩いて喜ぶ。うんうんと頷くばかりになつてしまつたシンゾウに、馨は羨ましそうに言う。

「かっこいいよねえ、要さん。普通なら、リップサービスでしょ、つてなるのに、あの人の場合には本気でそう思つてるみたいだもん」

実際問題、『言うは易く、おこなうは難し』の典型例だろうに、要という男はきつと何でもないことのように、美音のいる場所を自分の居場所とするのだろう。そこまで想われれば、女冥利に尽きる、と馨は言うのだ。

「まあ、馨ちゃんの気持ちもよくわかるし、美音坊の気持ちもわかる。美音坊が、要さんのおつかさんを心配するのももつともだ。でも、どつかで踏ん切らないと、美音坊自身が幸せを逃がしちまうよ。かといって……」

ウメは困惑顔でシンゾウを見た。このままこうしていても仕方がない、ということで、シンゾウはいつたん解散することにした。

「今日のところはここまでだ。なに、心配しなくとも、きっと手はある。みんなで知恵を絞ろう。三人寄れば文殊の知恵（もんじゅ）っていうが、三人で駄目なら四人でも五人でも頭を寄せ合えばなんとかなるさ」

シンゾウの言葉に、馨も大きく頷いた。

「うん。あたしも一度、要さんときちんと話をしてみる。お姉ちゃん、あのままだりどうにもなんないし、もしかしたら思つてることをちゃんと伝えてないかもしない。お姉ちゃんはこれこれこういうことで悩んでますけどーって投げてみたら、要さんなら案外さらっと解決してくれるかも」

「確かにあの人なら、ぱぱぱっとなんとかしてくれそうだ」

「そうだそうだ、とウメもマサもほつとしたような顔になる。一方、シンゾウの心中は複雑だ。

これまで、町内の困りごとの大半は自分が中心になつて解決してきた。それなのに、美音の問題にはこれといった解決策を示してやれない。せっかく馨が頼つてきてくれたというのに、何という不甲斐なさだ、と情けなくなつてくるのだ。

ところが、そんなシンゾウの様子を見て、馨が深々と頭を下げた。

「シンゾウさん、それからウメさんもマサさんも、今日は本当にありがとう」「いや、俺たちは何の役にも……」

「ううん。こうやって場所を移して、時間を取つて一生懸命に考えてもらえただけ十分だよ。今まであたたちがやってこれたのは、シンゾウさんたちがいてくれたからこそだし、ものすごく幸せ者だと思つてる」

「やだよ、馨ちゃん。何を改まつて……」

「だつて、ウメさん。こんなときじゃないと言えないじゃない」

「馨ちゃん……」

「あたし、決めた。心配してくれたみんなのためにも、お姉ちゃんには幸せになつてもらうし、あたしもちゃんと自分が納得できる方法を探す！」

「おう。その意気だ。でもな、うんと遠くに引っ越すつてのは勘弁してくれよ。

俺たちも寂しくなつちまうからな」

そう言うとマサは、わざとらしく鼻を啜<sup>すす</sup>つた。さらにウメは、また自分の家の

空き部屋のことを持ち出す。

「いざとなつたら、うちにおいでよ。新婚夫婦は無理でも、馨ちゃんひとりなら平気だろ？ お嫁にいくまでの間、あたしとクロと一緒に住めばいいさ」

「うわー心強い、ありがとうウメさん。でも、そんなことしたらまたお姉ちゃんがギャーギャー騒ぎそう」

「だな。きっと美音坊、よそ様にご迷惑をかけてまで、お嫁にいこうなんて思ひません！ なんて目を三角にするぜ」

マサは指を目尻にあてて吊り上げる。そんな仕草に一同が大笑いし、気の重いまま終わりそうだった話し合いはなんとか明るい雰囲気で散会した。

+

『——ということで、要さん。私どうしたらしいと思います？』

馨からの長いメールは、そんな一文で結ばれていた。

要は、あまりにも馨らしい文章に噴き出しそうになつた。メールを読んだのが会社でなければ、盛大に笑い出していたことだろう。

美音と馨は月に二度おこなわれる町内会主催の公園掃除に、交替で出席している。メールを読む限り、今週は馨の番だつたようだ。

遅々として進まぬ、どころかまつたく始まる気配さえ見えない結婚の準備にしびれを切らした馨は、なんとかならないかと町内の意見番に相談した。さらに、姉が結婚したあとの自分の身の振り方についても考えてみたが、いいアイデアは浮かばなかつた。姉に迷惑はかけたくないし、なんとか上手くいく方法はないか、というのがメールの主旨である。

いる。

——下駄を預けるつてことか……。これぞ、『下の子気質』だな。

静まりかえったオフィスで、笑いを堪えつつ要是考える。

生まれたときからずっと、しつかりもののお姉ちゃんに庇かばわれてきた純正の『下の子気質』。

美音と馨は姉妹の仲もすこぶる良かつたに違いない。要のように、兄の怜れいに対してひねくれた思いを抱くこともなく、馨はただただかわいがられ、面倒を見てもらつて育つた。馨がとても甘え上手で、誰とでもすぐ打ち解けるのはそのせいだろう。明確に境界を設け、なかなか本心をさらけ出さない美音とは対照的な妹だった。これが美音であれば、絶対にこんなメールは寄越さない。ひとりで延々と悩み続けるに違いない。

『ぼったくり』にはちよくちよく出入りしているし、早めの時間に足を運べば馨に会うことも可能だ。けれど、妹が自分の恋人にこんなメールを打つたと知つた

ら、美音は馨の首を絞めかねない。

さすがにそれは気の毒、ということで、要は美音の目に触れないところで馨に会うこととした。

『ぼったくり』で働く馨を夜に呼び出すことは難しい。かといって、昼間は自分が仕事をしている。

思案の末、要は昼食時なら会えるかもしれないと思いついた。早速メールで確認したところ、すぐに返信が来て、ふたりのランチミーティングは三日後の正午からと決まったのだった。

要が会合の場に選んだのは、とある老舗料亭しにせだった。その店なら馨が出てくるのに交通の便も悪くないし、何より個室がある。他人の目を気にせずに話ができるだろう、と考えてのことである。

ちょうどその日、要は店の近くの現場で打ち合わせの予定が入っていた。そのため、時間に遅れることはないと考えていたのだが、あいにく打ち合わせが長引

き、要が到着したのは正午を十分ほど過ぎた時刻だった。

馨は既に部屋に通されていて、要が着くなり頭を下げる。

「ごめんなさい。お忙しいのに」

「いや、ぜんぜん。こっちこそ、待たせて悪かった」

そこで要は、お茶を運んできた仲居にふたり分の昼懐石を注文した。馨に注文を訊くべきか一瞬迷つたものの、どのみちこの店のランチタイムは、昼懐石か天丼、あるいは刺身定食ぐらいしか出さないし、昼懐石はこの店の売りでもある。料理に携わる仕事をしている馨なら、昼懐石を選ぶだろうと考えてのことだった。料理案の定、馨は注文に関しては異議を唱えず、神妙な顔でおしほりを使っている。

『ぱつたくり』界隈ではかなり若いほう、かつ盛り上げ役の馨は、普段から賑やかな言動が目立つ。それなのに今日に限ってこんなに落ち着いている。場所が変われば、こうも変わるものか、と不思議になるほどだった。

とはいって、馨はすでに二十代後半だ。TPOぐらいわきまえていて当然だし、落ち着きすぎるほど落ち着いている姉の手前、道化を引き受けざるを得なくなつ

ているのかもしれない。

「で、あたし、どうしたらいいと思います?」

馨のあまりにも単刀直入な質問に、要はまた笑い出しそうになる。なんという両極端な、それでいて、目の前の問題をなんとかして解決しようという姿勢そのものはとても似ている姉妹だった。

「君はどうしたいの?」

まずは本人の希望を聞き、それが叶えられるかどうか、叶えるために何をどうすればいいか考える。それは、日常生活のみならず、仕事にも共通する要のやり方だった。

どうしたいって訊かれてもなあ……

馨は、半ば困惑して向かいに座る男に目を向けた。

『ぱつたくり』に来ると、彼はいつもワイシャツにネクタイ、作業服の上衣というスタイルだ。けれど今日は、ビジネススーツをきちんと着こなしている。お

そらく、老舗料亭しにせという場所を考えてスーツにしたのだろう。

お茶を運んできてくれた仲居さんへの対応も無礼とかぞんざいといった言葉からはほど遠く、そつがないとしか言いようがない。ただ、そんな姿からはあまりにも隙うかがといいうものが窺えず、彼にとつて『ぼつたり』がどれほどリラックスできる場所なのかを痛感させられた。

姉は普段から、要さんは『ぼつたり』だけではなく、この町 자체にそぐわない、掃き溜めに鶴もいいところだ、と言っている。それでも馨ときとしては、子猫の治療費の支払いや大間抜けなプロポーズの話を聞く限り、『ぼつたり』界隈かいわいの住民とどっこいどっこいじゃないかと思つていたのだ。

けれど、こうやつてそこら中から『高級』という文字が浮かび上がつてしまふ店にいる要は、まったく違和感がなく、姉の言うことはやはり正しいような気がしてきた。

確かにこの人は佐島のお坊ちやまなのだ。よくぞまあ、こんな人がうちの店の常連になつたものだ、と改めて感心してしまう。

その隙のないお坊ちやまに、面と向かつて『君はどうしたいの?』なんて訊かれても、即答なんてできない。それがわかつてゐるぐらいなら、こんな会合必要ないでしょ、と言い返したくなるほどだつた。

答えを見つけられずに困つていると、要はふつと笑つて質問を変えた。

「じゃあ、イエスかノーで答えられるようにしようか。おれたちと一緒に住むのはどう?」

「ノー。勘弁してほしいです」

おそらく本人たちは無自覚なのだろうが、馨にしてみれば、このふたりのやりとりは甘つたるすぎる。このふたりと一緒に暮らしたら、全身砂糖まみれであつという間に『馨の甘露煮かんろに』の出来上がりだ。正直、まっぴらごめんだつた。

『まっぴらごめん』という思いは、ストレートに顔に出ていたらしく、要は苦笑しつつ両手を上げて、馨を宥めた。

「わかつたわかつた。じゃあ、次の質問だ。君はあるの町から出たくはないよね?」「はい。でも、そんなの無理だし……」

「どうして?」

要は、まるで天然そのものの姉みたいに小首を傾げて問い合わせた。

「住む場所がありません。あの町には賃貸物件が少ないし、その数少ない賃貸も空き部屋なんてまったくありません。治安がいいし、商店街も近くで便利なので、多少駅から遠くても住みたがる人が多いんです。新しいショッピングセンターができたせいで、さらに人気が上がったみたいだし、入れ替わりだつて滅多にないんです」

要は、早速届いた料理に箸をつけつつ、馨の話を聞いている。昼休みを使つていることはわかっているし、仕事に差し障りがあつては大変だと思った馨は、自分も食べ始めたことにした。

冷めないうちに、と蓋を取つたお椀から濃く引かれた出汁の香りが立ち上る。次いで馨は、かわいらしい手鞠麺に目を奪われた。難しい相談事を持ち込んでおいて、本題そっちのけで食べ物に見入つてしまふなんて、自分は案外姉に似ているのかもしれないと思う。

要は、出汁の香りと手鞠麺にため息を漏らした馨を、クスクス笑う。「そつくりだね」という声が聞こえたところを見ると、同じように感じているのだろう。

香りから感じた期待をまつたく裏切らないすまし汁を味わつたあと、馨はまた話し始めた。

「そういうわけで、あの町内に住むことは無理なんです。駅裏の古いマンションかアパートならなんとかなるかもしれませんけど……」

「あの辺はあんまりおすすめとは言えないな。家賃は手頃かもしれないけど、強度面がかなり心配だ。耐震補強をやつた気配もないし、それぐらいならうちが建てた表のマンションのほうがずっとといい」



分譲が多い建物だが、いくつかは賃貸物件もあつたはずだ、と要は言う。

馨だつてそれぐらいのことは知つていたが、建物がしつかりしている上に駅の真ん前という物件が借りられるわけがなかつた。

「そりやそうでしょうけど、あそこの家賃はきっとすごく高いんでしょう？ あたしには払えません」

「うーん……」

要がもろに困つた顔になつた。

その理由は明白だ。どうせ彼のことだから、それぐらい自分が……とかなんとか言おうとしたに違ひない。そして、次の瞬間、それを言つたら馨や美音がどう考へるかに思い至り、言うに言えなくなつたに決まつてゐる。

要が、美音と馨の財布事情を知つてゐるとは思えない。けれど、彼はやり手のサラリーマンらしいし、『ぱつたくり』なんて名ばかりの居酒屋がどの程度利益を上げてゐるかの見当ぐらいつけられるだろう。それをふたりでどう分けていたところで、駅前の立派なマンションの家賃なんて払えるわけがない。そもそも、

住居費なんて今までずっとゼロできたのだから、どんな金額だつて負担が増えることになつてしまふのだ。

それでも、『おれには余裕があるから払う』なんて口に出した日には、姉は烈火のごとく怒るだろう。

「本当に君たちはよく似てゐるし、おれが今まで見てきた人たちとあまりにも違ひすぎて面白食らうよ」

要は言外に『すぐに兄妹になる仲なんだから、もう少し頼つてくれても』と匂わせてくる。だが、それに甘えることはできないし、馨自身、したくなかった。

要は、焼きたてで運ばれてきたサワラの西京漬けを箸でほぐしてい。そのいかにも育ちの良さそうな箸使いを見ながら、馨は言つた。

「家賃ならおれが……とかは、絶対言わないでくださいね」

「やつぱりだめかな」

馨は西京漬けに添えてあつたハジカミかじを囁き、少し甘すぎる西京味噌の後味を消しながら答えた。

「駄目に決まつてるでしょ？　お姉ちゃん、『激おこぶんぶん丸』になっちゃいますよ」

要が『激おこぶんぶん丸』なんて言葉を知っているとは思えない。なにせ語源もはつきりしない、いわゆる『ギャル語』なのだ。それでも、美音の怒りを表現しているということぐらいはわかつてくれるだろう。案の定、要はすんなり頷いた。

『『激おこ』かあ……それは困るな』

「お姉ちゃんは、水商売への負い目が馬鹿みたいに大きいんです。誰かにお金を出してもらうなんて、まるでパトロンみたいだつてぎやあぎやあ言うに決まっています。ましてや、要さんがあたしの家賃を払うなんてことになつたら、『馨を囮う氣なの！』とか、仁王立ちで怒鳴りますよ」

「あの子猫のときみたいに？」

「あんなもんじやすみません」

あのとき要は、特に深い考えもなく子猫の医者代を支払ったのだろう。おかげで味わうことになつた苦い思いを忘れているとは思えない。

一度限り、しかも拾つた子猫にかかる病院代ですらああだったのだから、血を分けた妹の毎月かかる家賃となつたら、どれほど怒るかは火を見るより明らかだつた。

「要は、最大級の苦笑いを浮かべている。まつびらごめんと顔に書いてあつた。

「あれは勘弁してもらいたいな」

「でしよう？　本音を言えば、あたしはありがたく頂戴したい気持ちもありますが、お姉ちゃんに滅多切りにされるのは嫌です」

「そうか……じゃあ、どうしようね？」

「それを相談しに来たんじゃないですか」

大人の知恵を貸してください、という思いを込めて、馨は真っ直ぐに要を見つめた。

「め

要はちょっと途方に暮れた気分だった。

にかぶりついている。端っこにちょっと塩を付けたキスがさくっと音を立てて馨の口の中に消えた。

若いだけあって食べ方も豪快、スピードも気持ちがいいほどだった。  
馨に釣られるようにはけつこうなスピードで食事を進めながら、要は頭の中で状況を整理する。

まず美音の希望。言うまでもなく、彼女はあの町を離れたくないと思つてゐる。  
それに、要自身があの町と関わつてみたいし、あの町に住んでいる美音が好きな  
のだ。

『ぼつたくり』の女将おかみという仕事を続ける上でも、徒歩で通える距離は望ましい  
し、通勤に時間を取られるなんてもつての外だ。できることなら、通勤時間なん  
てゼロにしてやりたいほどだった。

「あ……そうか！」

思わず、大きな声が出た。

馨は怪訝けげんそうな目で見てくるが、かまつていられない。要はたつた今浮かんだ

アイデアを、実現する方法を考え出すことで頭がいっぱいだつた。そしてほどな  
く、その方法を思いつく。

「通勤時間がもつたらない。それなら、ゼロにしちゃえはいいんだ」

「ふあ？」

あまりにも唐突な台詞せりふだったのか、馨は大きなエビ天を口に入れてもぐもぐし  
ながら、間の抜けた返事をした。

「『ぼつたくり』は平屋だよね？」

「え、ええ。いつもご覧になつてるとおりですけど？」

続いて小さく、見てわからなきや聞いてもわからん、なんて、マサあたりが言  
いそうな台詞が聞こえる。それには応えず、要は話の先を急いだ。

「あの商店街は店舗併用住宅、つまり店の上に住んでる人が大半だけど、『ぼつ  
たくり』もそうすればいいんじやないかな。今の平屋の上に、住まいを増築するつ  
ていうのはどうだろう？」

酒屋を、美音の両親が買い取ったものらしい。

美音によると、最初は借りていたそうだが、何年かしてから買い取ってくれないかという話が出てきたそうだ。美音の父親は相当悩んだらしいが、破格の値段だつたし、このまま賃料を払い続けるよりは……ということで、清水の舞台から飛び降りるつもりで買い取ったのだという。

あの町は駅から離れているため、駅に行くにはバスに乗るしかない。居酒屋は夜遅くまで営業する商いだし、店を閉めたあとも片付けやら翌日の仕込みやらもない建物はどうしたって不便になる。借りるならまだしも、買うとなつたら二の足を踏むに違いない。ところが、その時点では既に美音の両親は町内に家を構えていて帰る足の心配はなかつた。店一軒の価格としては破格も破格。その理由が交通の便と店舗にしか使えない平屋だということなら買うしかない、と判断したそ

とはい、なんとか買い取つたもののそのための借金は重く、それ以上お金をかけて手を入れることなど考えられなかつた。加えて、家は別にあるのだからわざわざ住めるようにする理由もない。

それが、周り中が店舗併用住宅である中、なぜ『ぼつたくり』だけが平屋のままなのか、という要の問い合わせに対する美音の答えだつた。

それならば、『ぼつたくり』の上に住居を増築し、美音と要是そこに住めばいい。美音は通勤時間がゼロになるし、馨もこの町から離れずにする。起死回生の逆転ホームランだ、と要是自画自賛してしまつた。

「つてことで、おれたちが『ぼつたくり』に引っ越せばいいと思うんだ」  
「いや……要さん、それはちょっと……」  
「え、だめ？ なにか問題があるのかな？」

「いつも簡単にそんなことを言う要に、馨は畠然あぜんじとしてしまつた。  
美音が『ぼつたくり』の上に住み、自分は今家の残る。確かに、それで万事

いつか馨が結婚したとしても、あの家なら十分暮らしていける。哲だつて喜んでくれそうだ。

なんといつても住居費がゼロなのだから、こんなにありがたい話はない。

だが、建物に手を入れるにはお金が必要だ。内装をちょっと弄るだけでも、六桁を超えるお金がかかつてしまふ。ましてや、今、要が持ち出したのは内装云々ではなく、増築なのだ。

今はふたりだとしても、将来家族が増える可能性を考えれば、部屋数だつて設備だつてそれ相応のものが必要だ。どうかすると、今ある部分より建て増し部分のほうが大きくなりかねない。補強だの何だの言いだしたら、家一軒建てるのと大差ないのではないか。

姉はそもそも締まり屋だし、仕事ばかりでお金なんて使う暇はなかつた。それなりに蓄えはあるはずだが、家一軒建てられるほどとは思えない。もちろん、馨自身、じやあこれを足しにして、なんて差し出せるようなお金もない。

「いいアイデアだとは思うんですけど……」

アイデアは素晴らしいのに先立つものがない。悩ましいというか、悔しくなるレベルの話にすっかり食欲が失せ、馨はどうとう箸はしを置いてしまつた。

それなのに、要は何食わぬ顔で訊たずねてくる。

「もしかして、お金のことを心配してゐる？」

「はい。だつて、お姉ちゃんもあたしもそんなお金はないし、借りようにも……」三十そこそこの娘、しかも自分たちは会社勤めもしたことがない。社会的信用という意味では底辺に近い自分たちに、お金を貸してくれる人なんていないだろう。銀行だつて門前払いされるに決まつている。

馨の話を聞いた要は、明らかに落胆している様子だつた。せつかくのアイデアを生かせないのだから無理もない。ところが、あまりにも申し訳なくて謝ろうとした馨を、要は片手で制した。

「ごめんなさい、っていうのはなしだよ。これはそういう話じゃないんだ」

「……ていうと？」

た。

「君たち姉妹は、本当に ore をなんだと思つてゐるんだろうねえ」  
「はい？」

「おれさあ、自分で言うのもなんだけど、これでも会社ではそこそこ評価され  
るし、給料だってけつこうもらつて。貯金もそれなりにはあるし、銀行からも  
借りようと思えば借りられるはず。自分が住む家にかかる金ぐらいなんとかでき  
るよ」

君が住む家の家賃じやないなら、美音も文句は言わないだろう。たとえ言つた  
としても、おれがおれの住む環境を整えてどこが悪いって言い返すけどね、と要  
は笑つた。

「それでもぶつぶつ言つたら、君はおれをヒモにする氣か、つて言うことにする」  
「ヒ、ヒモ……」

馨は、そう言われたときの美音の顔が目に浮かびそうだつた。

文句はいくらでも言いたいだらうに、つけいる隙がまつたくない。というか、

聞く耳持たないままに突つ走りそなこの男に、ため息を連発することだらう。  
目の前の男はこれが一番手つ取り早くて、みんなの希望に添う方法だと確信し  
ているように見える。もはや、要を止められるものなんてない。それこそ、佐島  
建設創業者一族として、持てる伝手やらコネやら全部使って、あつという間に工  
事を終わらせ、さあ住むぞ、とばかりに乗り込んでくるに違ひない。  
「そんな感じでどうかな？」

要是は、満足そうに馨に確認を取つてくる。

早急に姉に提案して、可及的速やかに増築を進めるつもりだから、協力をよろ  
しく、ということだらう。うまくいくかどうかはわからないが、それこそダメ元  
である。なにより、不利益は一切ないのでから乗つかるしかない、というのが、  
馨の正直な感想だった。

「あたしにとつては、すごくありがたいお話です。お姉ちゃんがなんて言うかは、  
わかりませんけど……」